

学級規模が児童の学級適応に及ぼす影響 (4)

— 少人数学級と通常学級に在籍する児童の保護者を対象に —

宮前 淳子・馬場園 陽一*・大久保 智生・高尾 明博**・田崎 伸一郎**・有馬 道久

760-8522 香川県高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*780-8520 高知県高知市曙町2-5-1 高知大学教育学部

**760-0017 香川県高松市番町5-1-55 香川大学教育学部附属高松小学校

Class Size and Pupils' Adjustment (4)

Junko Miyamae, Yoichi Babazono, Tomoo Okubo, Akihiro Takao, Shinichiro Tazaki,
and Michihisa Arima

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Faculty of Education, Kochi University, 2-5-1, Akebono-cho, Kochi 780-8520*

***Takamatsu Elementary School, Kagawa University, 5-1-55, Ban-cho, Takamatsu 760-0017*

要 旨 本研究では、学級規模の違いが保護者の学校生活認知と子育て不安とに及ぼす影響について、子どものきょうだい関係の要因をふまえて検討することを目的とした。対象は、少人数学級に在籍する小学校1年生の保護者118名と、通常学級に在籍する小学校1年生の保護者104名であった。計222名に対して質問紙調査を実施し、学級規模と子どものきょうだい関係を要因とした分散分析を行った。結果から、少人数学級に在籍する子どもの保護者の「対教師認知」が通常学級の保護者に比較してポジティブであることが明らかとなった。また、少人数学級においては、きょうだいのいる子どもの保護者のほうが、「対子ども認知」がポジティブであり、「子育て不安」が低いことが明らかとなった。少人数学級のプラスの効果が示される一方で、「子どもの人数が少ない」という物理的特徴がひとりっ子をもつ保護者の意識に影響を及ぼす可能性が示唆された。

キーワード 学級規模, 保護者, 学校生活認知, 子育て不安

問題と目的

本研究は、少人数学級制という物理的措置が、保護者の学校生活認知と子育て不安とに及ぼす影響について検討したものである。

少人数学級制の推進に伴い、その教育効果に関する研究がなされるようになってきた。たと

えば、学級の規模が児童生徒の学校生活や教員の指導に影響を及ぼすこと(谷, 2003)、教員は通常学級よりも少人数学級のほうが望ましいと考えていること(山崎・世羅・伴・金子・田中, 2001)などが明かにされている。また西口(2003)は、少人数授業では教師に対する子どもの親和性が高まることを示しており、大久

保・山本・藤井・辻・横山・有馬 (2007) では、少人数学級や複数担任学級に在籍する子どものほうが、通常学級に在籍する子どもよりも、教師との関係を肯定的に評価していることが明らかにされている。少人数学級制は、教員にとって望ましい学級編成の在り方であると同時に、児童の学校適応という観点から考えてもプラスの面が多いとすることができるであろう。

では、少人数学級制によるこうしたプラスの効果は、保護者の認知や情緒にどのような影響を与えるのであろうか。石隈 (1999) は、「学校場面における子どもに対する援助を考える際、保護者の存在と保護者自身の情緒の安定は重要な鍵となる」と述べており、援助者としての保護者の重要性を強調している。とりわけ子どもの年齢が低い場合には、保護者の心理的なエネルギーの大きさやそのベクトルの向きが、子どもに反映されやすい傾向にある (酒井, 2005)。それゆえに、「うちの子には仲良しの友だちがいる」、「担任の先生は、うちの子をしっかりみてくれている」といった学校生活に対するポジティブな認知は、保護者の情緒的安定とゆとりある子育てに結び付くのではないかと考える。

山本・大久保・藤井・辻・横山・有馬 (2007) は、小学校1年生～3年生に在籍する保護者を対象に調査を実施し、学校での子どもの生活を保護者がどのように認知し、子育てにどの程度の不安を抱いているのかについて把握するための尺度を作成している。また、少人数学級に在籍する子どもをもつ保護者が通常学級に在籍する子どもをもつ保護者に比べて担任を肯定的に認知していること、さらに子育てに対する不安も低いことを明らかにした。だが、山本他 (2007) では、少人数学級群は1年生の保護者から構成されているものの、通常学級群は2・3年生の保護者から構成されている。大久保他 (2007) で指摘されているように、少人数学級制の効果よりも学年の効果が結果に反映している可能性は否めない。したがって、同一学年でかつ学級規模の異なる集団を対象とし、学年の条件をそろえたうえで学級規模の効果について検討する

必要がある。

また、保護者の学校生活認知や子育て不安には、上の学年にきょうだいがいるかどうかという要因が関連しているのではないかと思われる。本研究では、小学校1年生の保護者を対象としているが、上にきょうだいがいる場合には、保護者は小学校での学習活動や行事のようす、子どもにまつわる日常の様々な出来事をすでに経験していると推測できる。また、教師や他の保護者との人間関係もある程度は構築されており、学校に関する情報もより多く持っていると思われる。その一方で、わが子がはじめて小学校に入学したという保護者もいるだろう。その場合には、保護者も子どもと同様に、はじめての小学校生活への期待と漠然とした不安を抱えているのではないだろうか。

そこで本研究では、小学校1年生に在籍する子どもの保護者を対象に、少人数学級制という物理的措置が保護者の学校生活認知と子育て不安とに及ぼす影響について、きょうだい関係の要因をふまえて検討することを目的とする。

方法

調査時期および調査協力者

2008年1月に、四国圏内のA小学校1年在籍児童の保護者118名 (男性9名・女性109名, 平均年齢=37.91歳, SD=3.89) およびB小学校1年在籍児童の保護者104名 (男性5名・女性99名, 平均年齢=37.47歳, SD=4.48), 計222名に対して質問紙調査を実施した。A小学校は少人数学級 (1学級30名, 担任1名) が導入されており、一方、B小学校は通常学級 (1学級40名, 担任1名) であった。

調査協力者である保護者の続柄は、父親あるいは母親のいずれかであった。なお、本調査が学校の成績や児童評価とは関連がないことや、調査協力者の回答は研究成果の発表にのみ使用されることを伝えることで、倫理面への配慮を行った。

質問紙の構成

以下の2尺度および回答者のデモグラフィック特性に関する質問から構成される質問紙調査票を用いた。

①保護者用学校生活認知尺度

山本他(2007)により作成された尺度である。「対教師認知」と「対子ども認知」の2下位尺度から構成される。12項目に対し、4件法(「よくあてはまる」～「全くあてはまらない」)で回答を求めた。

②子育て不安尺度

山本他(2007)により作成された尺度である。3項目に対し、4件法(「よくあてはまる」～「全くあてはまらない」)で回答を求めた。

③デモグラフィック特性に関する質問

調査協力者の性別と年齢、子どもの性別と学年について記入を求めた。また、対象となる子どものきょうだいの有無と、きょうだいがいる場合には最年長のきょうだいの学年について回答を求めた。なお、学校への意見や心配ごと等を自由に記述する欄を設けた。

「対子ども認知」、そして「子育て不安」の各得点を算出した。具体的には、それぞれの変数に含まれる項目の合計得点を項目数で割り、各得点として算出した。「対教師認知」と「対子ども認知」は得点が高いほど認知がポジティブであることを示し、「子育て不安」は得点が高いほど不安が高いことを示すように得点化を行った。

次に、子どもが在籍する学級規模を第一の要因として、保護者を以下の2群に分類した。1学級30名で1名の教師が担任するA小学校の保護者を「少人数学級」群とし、1学級40名で1名の教師が担任するB小学校の保護者を「通常学級」群とした。また、子どものきょうだい関係を「兄弟あり」「本人が最年長」「ひとりっ子」の3水準に分類し、第二の要因とした。「兄弟あり」群は2年生以上の兄弟がいる1年生の保護者から構成され、「本人が最年長」群は1年生の子どもにきょうだいはいるが、本人が最年長である保護者から構成された。そして、学級規模ときょうだい関係を独立変数とし、「対教師認知」「対子ども認知」、「子育て不安」をそれぞれ従属変数とした2要因分散分析を行った(Table1)。

結果

分析に先立ち、保護者の「対教師認知」と

分散分析の結果、「対教師認知」では学級規

Table1 学級規模およびきょうだい関係でみた保護者の学校生活認知と子育て不安

学級規模	少人数学級			通常学級			F-Value		
	兄弟あり	本人が最年長	ひとりっ子	兄弟あり	本人が最年長	ひとりっ子	学級規模	きょうだい	交互作用
N	55	42	22	46	41	17			
対教師認知	3.47 (0.50)	3.49 (0.29)	3.49 (0.37)	3.29 (0.50)	3.24 (0.49)	3.37 (0.48)	7.27**	0.23n.s.	0.31n.s.
対子ども認知	3.75 (0.35)	3.81 (0.29)	3.50 (0.56)	3.70 (0.42)	3.54 (0.46)	3.64 (0.45)	1.08n.s.	2.04n.s.	4.60*
子育て不安	2.23 (0.60)	2.27 (0.60)	2.71 (0.43)	2.24 (0.64)	2.58 (0.66)	2.35 (0.72)	0.05n.s.	3.09*	4.98*

カッコ内は標準偏差

* p<.05

** p<.01

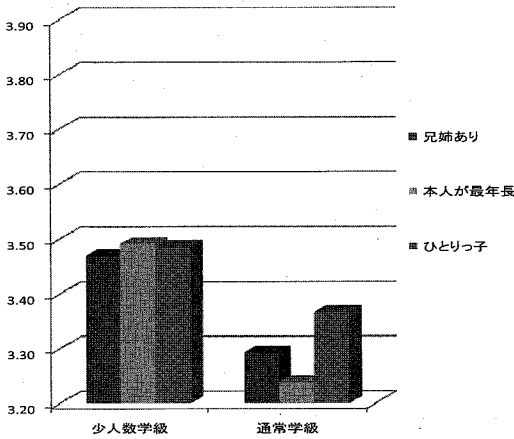


Figure1 「対教師認知」における学級規模・きょうだい関係別平均値

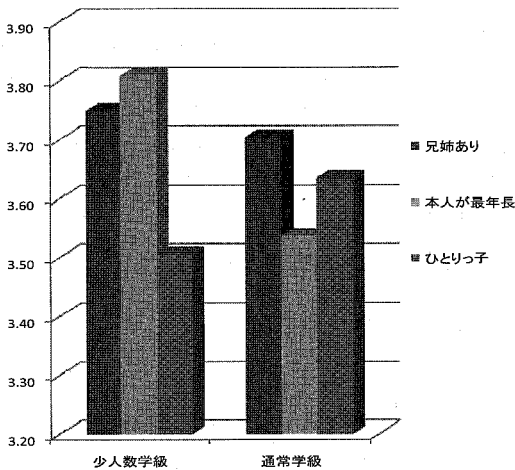


Figure2 「対子ども認知」における学級規模・きょうだい関係別平均値

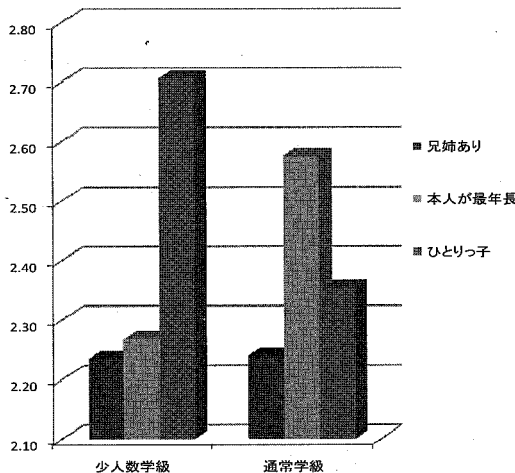


Figure3 「子育て不安」における学級規模・きょうだい関係別平均値

模の主効果がみられ ($F=7.27, p<.01$), 少人数学級の平均値が通常学級の平均値よりも高かった (Figure1)。一方, きょうだい関係の主効果は認められなかった ($F=0.23, n.s.$)。

「対子ども認知」では, 交互作用 ($F=4.60, p<.05$) がみられたため, 学級規模別に1要因分散分析を行った。その結果, 少人数学級では, 「兄弟あり」群と「本人が最年長」群の平均値が「ひとりっ子」群よりも高かった (Figure 2)。一方, 通常学級では3群間に有意な差はみられなかった。

「子育て不安」においても, 交互作用 ($F=4.98, p<.05$) が認められた。そこで, 学級規模別に1要因分散分析を行った。その結果, 少人数学級では, 「兄弟あり」群の平均値が「ひとりっ子」群よりも低かった (Figure 3)。一方, 通常学級では3群間に有意な差は認められなかった。

考察

本研究では, 学級規模の違いが保護者の学校生活認知および子育て不安に及ぼす影響について, きょうだい関係の要因をふまえた検討を行った。以下では, その結果について, 「対教師認知」「対子ども認知」「子育て不安」の変数ごとに考察を加えていく。

「対教師認知」については, 少人数学級に在籍する子どもの保護者が, 通常学級に在籍する子どもの保護者に比較してポジティブに認知していることが明らかとなった。この結果は, 山本他 (2007) による結果を支持するものであった。また, 「対教師認知」では, 子どものきょうだい関係による差異は認められなかった。このことから, 上に兄弟がいるかどうかにかかわらず, 少人数学級制が保護者の教師認知をポジティブなものにすることができる。

少人数学級には, 通常学級に比べ児童一人当たりの教師の関与度が物理的に高まるという特徴 (西口, 2003) がある。“担任の先生は, 子どもが失敗しても, そっと助けてくれる”, “担任の先生は, 子どもが新しいことに挑戦すると

き、励ましてくれる”といった担任に対するポジティブな認知は、教師の子どもに対する関与度の高さを反映していると考えられる。

子どもにとって、担任が自分だけに向かってかけてくれる言葉は、集団に向かっての発言よりも重要な意味を持つことがある。あたたかい言葉がけは子どもの心に残り、それを家庭で披露することも多いのではないだろうか。保護者の自由記述においても、“担任の先生が明るい先生で、子どもが喜んで先生のことを話してくれる”、“先生は、子どもの自主性を大切にしてくれている”など、肯定的な評価が多くみられた。少人数学級制により、教師は子どもひとりひとりに対する言葉がけをより多く、かつ丁寧にすることが可能となり、その積み重ねが保護者の認知に影響を与えているのではないかと思われる。

「対子ども認知」については、少人数学級と通常学級との間に有意な差がみられなかった。「対子ども認知」は、“子どもは、休み時間楽しく過ごせているようです”や“子どもは、学級で仲のいい友達があります”などの項目から構成される。大久保他(2007)においても、級友との関係に関する児童の自己評価には、少人数学級と通常学級との間で違いがみられなかった。このことから、子ども自身の評価が保護者の認知にもある程度反映しているのではないかと考えられる。

また、少人数学級においては、きょうだいがいる子どもの保護者のほうが、ひとりっ子である子どもの保護者と比較して「対子ども認知」がポジティブであることが分かった。一方、通常学級においては、こうしたきょうだい関係による差異は認められなかった。子どもが少人数学級に在籍しており、かつひとりっ子である保護者の場合、「わが子が関係をもつことのできる友達の数が限定される」という意識を他の保護者よりも強く持つことになるのかもしれない。とくに、A小学校では2年生以上から通常学級編成に変更されるために、「少人数学級制」が1年生時の特徴として意識されやすいのかもしれない。ひとりっ子である子どもの保護者で

あれば、当然ながら、「小学生の親」という立場に初めて立つことになったわけであり、小学校に関する情報も限られている可能性がある。子どもが日常生活において級友とどのような活動を展開しているか、また子どもが級友とどのくらい積極的に関わっているか等、担任が保護者に伝え、情報を共有していくことが必要であると思われる。

「子育て不安」については、「対子ども認知」と同様に、少人数学級と通常学級との間で有意な差がみられなかった。山本他(2007)の研究においては、少人数学級に在籍する子どもの保護者の平均値が、通常学級や複数担任制の学級に在籍する子どもの保護者よりも低いことが明らかにされている。だが、本研究では異なる結果となった。保護者の自由記述を概観すると、“自分が仕事で忙しいときにも、先生がしっかり見てくれているので安心できる”といった記述から、“子どもが学校でどのように過ごしているのか分からず、心配である”、“泣いて帰ってきたときに、どうしてあげたら良いか分からない”などといったものまで、その内容には幅があり、個人差が大きいように感じられた。保護者の不安の深さを測定するためには、山本他(2007)で作成された尺度では十分でないのかもしれない。この点については、自由記述をもとに子育て不安の尺度項目を再検討し、さらに信頼性の高い尺度を作成していく必要があるだろう。

また、少人数学級では、兄弟がいる子どもの保護者のほうが、ひとりっ子の保護者よりも子育て不安が低いことが明らかになった。小学校に入学すると、「親が子どものそばにいて、いつも見守っている」というような幼児期の物理的距離を維持することは困難になる(山本他, 2007)。子どもが教室でどのように過ごしているのか、困っていないか、泣いていないだろうか、保護者によっては心配なことも少なくないであろう。だが、きょうだいがいる保護者の場合、子どもの学校生活にまつわる様々な出来事はすでに経験されているものであり、余裕を持って対処できることも多いのではないかと思

われる。

ただ、通常学級ではきょうだい関係の違いによって子育て不安に有意な差は認められなかった。この結果は、「対子ども認知」に関する分析において、通常学級に在籍する子どもの保護者にきょうだい関係による違いがみられなかったことと関連するものと思われるが、本研究の結果のみでは十分に説明することができない。少人数学級においてきょうだい関係が保護者の不安に影響を及ぼす要因については、尺度の改訂とともに、さらに詳細に検討を行う必要があるだろう。

まとめと今後の課題

本研究では、少人数学級と通常学級とを比較して、保護者の「対教師認知」にプラスの効果があることが明らかとなった。小学校生活をスタートさせたばかりの1年生の保護者にとって、“先生は、わが子をよく見てくれている”と認知できることは、保護者の安心や学校への信頼感に結び付くものと思われる。

その一方で、少人数学級制の「子どもの人数が少ない」という特徴が、ひとりっ子をもつ保護者の「対子ども認知」や「子育て不安」に影響する可能性も示唆された。少人数という学級編制上の長所を最大限に活かすためには、通常学級と同様に、あるいはそれ以上の配慮をもって、家庭と丁寧に連携しようとする努力が必要であると思われる。少人数学級制においては教師と児童との相互作用が多いことが明らかにされているが(有馬, 2007), 児童と児童, また教師と保護者との相互作用も増大させていくことにより, 少人数学級制がさらに効果的な施策として意味のあるものになるのではないかとと思われる。

また、「子育て不安」に関しては、先行研究(山本他, 2007)とは異なる結果となった。こ

の点については、子育て不安尺度の項目および尺度の信頼性について、さらに検討することが必要ではないと思われる。また、今後は1年生の保護者だけでなく、他の学年の保護者も対象として、少人数学級制の効果について検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 有馬道久 2007 授業中の教師と児童の相互作用に及ぼす少人数学級の効果 平成18年度文部科学省教員配置に関する調査研究委託 30人規模の少人数学級における学習集団, 生活集団の教育効果についての実証的研究 香川大学 Pp.23-28.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 西口利文 2003 少人数授業が学級成員間の関係, 学習への動機づけ, 教師の指導理論へ及ぼす影響 中部大学人文学部研究論集, 9, 175-208.
- 大久保智生・山本淳子・藤井浩史・辻幸治・横山新二・有馬道久 2007 学級規模が児童の学級適応に及ぼす影響(1) -児童の意識調査から- 香川大学教育実践総合研究, 15, 33-40.
- 酒井律子 2005 不登校の子どもをもつ保護者へのアプローチ(特集 不登校) 臨床心理学, 5(1), 57-61.
- 谷 雅泰 2003 福島県の「30人学級編制」に関する考察: 県内公立小1年担任アンケート調査の分析 福島大学教育実践研究紀要, 44, 9-16.
- 山本淳子・大久保智生・藤井浩史・辻幸治・横山新二・有馬道久 2007 学級規模が児童の学級適応に及ぼす影響(2) -保護者の意識調査から- 香川大学教育実践総合研究, 15, 41-48.
- 山崎博敏・世羅博昭・伴恒信・金子之史・田中春彦 2001 学級規模の教育的効果: 児童生徒調査を中心に 教科教育学研究, 20, 107-124.